

宮崎滔天の長子宮崎龍介の中国認識

—その孫文観を中心に—

井 上 桂 子

Keiko INOUE. Ryusuke Miyazaki's view of China. *Studies in International Relations* Vol.37, No.1. October 2016. pp.27 – 33.

The main issue of this essay consists of two parts.

First, the main subject describes how Toten Miyazaki and his son Ryusuke encountered China in details, and their behavior toward Japanese and Chinese relations follows it.

Second, is to analyze Ryusuke Miyazaki's view of China.

In 1919, many Japanese approved of Sun Yat-sen's revolutionary ideas and assisted Xin-Hai revolution with both material and moral support that were actually keys to the success of the revolution.

As it were, Xin-Hai revolution was peculiar for distinctive aspects.

Japan played the important role as a basement giving both material and moral support, that affected whether the revolution would success or not.

Therefore, Japanese people from government and public became deeply involved in Xin-Hai revolution.

Among the Japanese supporting of Xin-Hai revolution, Toten Miyazaki has been researched intensively by both Japanese and Chinese scholars since early time.

Toten Miyazaki made much efforts to assist Xin-Hai revolution that build a good relationship between Japan and China. From this time, fine connection with China brought Toten's descendant for the opportunities to play an active part in Chain.

It is natural that Toten's son and nephew were deeply influenced not only by Toten's thoughts and action but also Xin-Hai revolution. They mediated peaceful association with Japan and China, in addition, made positive efforts to carry out a mission as an arbitrator.

Keywords : Xin-Hai Revolution Ryusuke Miyazaki Toten Miyazaki
Sun Wen Huang Xing

キーワード : 辛亥革命, 宮崎龍介, 宮崎滔天, 孫文, 黃興

はじめに

本論は宮崎滔天の長男宮崎龍介をとりあげ、彼と中国との出会いおよび日中関係に関わる行動を跡づけ、宮崎龍介の中国認識を考察する。

1919年の辛亥革命で多くの日本人が、孫文の「自国民が国を治めることが政治の最高の原則であり、それを脅かす列強の侵犯を防ぐには、すみやかな革命運動しかなく、(中国) 一国の蒼生(人民救済)はアジア黄色人種と世界の圧迫されている民族のためだ」という革命思想に賛同して、革命に投身する中国人革命家たちを物心両面で支援し

た。

あるものは家財を提供、あるものは政治力で支援、そしてある者は直接戦闘に参加して自身の生命を奉げた。日本が中国革命の成否を握る物心両面の基地となり、朝野の日本人が中国革命に重要な関わりを持ったという点で、辛亥革命は中国の革命史上特異な革命だったと言えるだろう。

日本人の辛亥革命支援者の中で、日中双方で先行研究が集中している人物は孫文と「推心置腹」の関係を結び革命支援に投身した宮崎滔天である。辛亥革命支援に狂奔した宮崎滔天と中国の関係を、滔天の子孫たち第二世代と中国との関係から見て

みると、子孫と中国との関係の契機は滔天であり、滔天は第二世代の道標である。そして第二世代が行動するときのかけがえのない中国人脈の根も滔天であった。

宮崎滔天と中国革命の影響を身に受けて成長した滔天の息子ら第二世代は、民間人として時代時代の日本と中国の平和的関係を支え、日中の“鎧(かすがい)”としての役割を積極的に担ったのである。

1. 宮崎龍介の家庭環境

宮崎龍介（以降、龍介と略称する）の父宮崎滔天（以降、滔天と略称する）が生涯をかけることになる中国革命支援の第一歩は、1892年の初訪中であつた。この年の11月2日（出生届は11月18日）龍介は父滔天と母槌子の長男として熊本県玉名郡荒尾町（現・熊本県荒尾市）で生まれた。1894年には弟震作、1897年には妹セツが誕生した。龍介らの幼少期熊本の自宅に父の姿はなく、三児は母槌子の女手ひとつで育てられた。父滔天は結婚後も「支那革命と亜細亜の解放」の理想を追い求め国内外を走り回わり、妻子の扶養よりも自らの大志を達成することに懸命だった。

滔天は蜂起に失敗して海外逃亡した孫文と1897年9月、横浜の孫文の同志陳少白邸で邂逅した。自身の理想を孫文の革命思想に見出した滔天はこのち、孫文の中国革命に全精力をつぎ込み、孫文や同志の中国人革命家たちと革命活動に東奔西走した。そのかたわらで熊本の槌子や龍介ら家族は置き去りにされた。

母槌子は熊本県玉名の名士前田案山子の三女である。父前田案山子は1890年～92年衆議院議員を務め、前田家は「熊本に出るのに他人の田畑を踏まずに行ける」¹と言われた当地の素封家であった。温泉付きの前田家の別荘には、犬養木堂や中江兆民、頭山滿、中国革命家黃興らが次々と訪れ、夏目漱石は前田家の別荘で小説『草枕』を執筆した。槌子の姉の卓（ツナ）は『草枕』の「那美」のモデルとして知られている。

槌子は賢明で気丈な九州女性であつた。夫滔天の中国革命思想は結婚前すでに確立されており、

それを承知で滔天と結婚した。それもあつて不在の夫を恨まず、自身の裁量で下宿宿を開いたり「数頭の牛を飼い、牛乳屋を営み」²むなどして健気に子供を養った。しかしそれにも限界があり、体をこわし育ち盛りの三児を伴って富農の滔天の実家³や自身の前田家に寄留し、一家の糊口をしのぐことも一、二度ではなかった。思い余つて滔天に困窮を訴える手紙を送ると、滔天は「御苦心の程を案すれば腹裂くるばかりに候へども、しばらく辛抱仕りおり候。（中略）最愛の妻子をこの貧困のなかにゆだねて出ていく夫の心も又大分苦しきものに候」⁴と慙愧と同情に満ちた返事を寄こすのだが、それでも革命の現地調査のために、同志の末永節、平山周、槌子の弟前田九二四郎らとともに外国に出かけて行くのであつた。

奔放な夫を持ち赤貧に苦勞する母の姿をみて成長した龍介にとって、父滔天は家族を養わない身勝手な親に他ならなかった。「豪放酒を嗜んで天下国家を論じていた父を、幼年の僕に理解できよう筈はなかった」⁵。「なけなしの家産を傾け盡し、郷里肥後の一寒村に家族を残して東京に出て、殆んど風来坊の如く、放浪児の如く、消息すら絶って四方を流浪していた父に対して、女手一つで神に祈り佛に念じて、幼い僕等を育んだ母、やんちや小僧の僕等の前に、或る時は涙を垂れて、偉くなってくれよと訓した母、幼年の僕の心には、父よりも母をどれだけ有り難いと思ったことか知れない。僕が高等小学校の二年、今の尋常六年を卒へて東京に出て、中学の一年に這入った頃までは、僕は飽くまで母の味方であつた。酒びたしの父を白眼視していた僕は、到底父の味方になれなかった」⁶。

槌子の奮闘も尽きて郷里での生活がいよいよ立ち行かなくなり、一家は龍介が小学校を卒業するころ熊本の家をたたんで父のいる東京に移った。1905年1月、龍介は東京で初めて父滔天との生活を始めた。龍介十三歳、震作十一歳、セツが八歳のときである。

2. 父の中国革命支援に向きあう

幼児期自分たちと母を貧苦の中に放り出した父を龍介は冷淡に眺めていた。しかし東京で父と暮

らし身近で父が狂奔する中国革命運動に接するなかで龍介は、父の理想と父が命をつぎ込む中国革命にいつしか自身も向き合うことになっていった。

この年の1月、龍介と弟震作がまず東京に出た。父とはじめて住んだ家は四谷愛住町の二軒長屋だった。この後槌子と妹セツが加わり、さらに大学入学を期に東京に出てきた甥の築地宜雄（滔天の姉富の三男―筆者注、以後（）内は筆者注）も同居するので、3月ごろ一家は内藤新宿番衆町の一軒家に移る。

滔天一家が同居を始めた1905年は、孫文らの革命にとっても非常に重要な年であった。甥の築地宜雄は「貧窮にも拘らず、旧友、新知の日（日本人）支（中国人）の来訪が漸増し、滔天と要談密議して去るものが多くなりました。其頃ひそかに来訪する中国留学生の中には往々特に孤独、悲壮、警戒的に見ゆる人がありました。（中略）滔天は彼らの心情に深く同情して居たようであります」⁷と、中国同盟会成立（1905年8月20日赤坂靈南坂坂本金彌邸、加盟者約百名）の機運がいよいよ高まり緊張感に満ちた当時の様子を記している。

龍介よりひと回り年長の築地は、滔天と中国人との関わり方についても興味深く観察し、次のように記している。「滔天は中国人と交わるに当たっては相手方の気持を踏みにじらないように努め、共感点や共鳴点を見出そうとした」。「滔天は相手は幸福なることを自分の満足とし、自分の犠牲を嫌わなかった」⁸。築地は叔父滔天の繊細さと悲観を知らぬ善良な一面を見いだしていた。

「他の（人の）同棲を拒む事は、私の性質として出来得ざる儀」⁹という滔天の気質から、龍介らの家はすぐさま中国革命家たちの連絡所、逗留所、避難所となった。槌子によると、孫文は滔天一家の家を事務所代わりにしていた。「（1905年）初夏だと思います。孫文さんは再び日本に來られ（中略）むさくるしい私共の番衆町の家にトランクを持ち込み、狭い六畳に甘んじて其処を自分の出張所にしておられました」¹⁰。その孫文を訪ねて昼夜を分たず家に入出入りする中国青年、革命家たちの世話をするのは、槌子や龍介ら家族だった。

祖国に家族を置いて命がけで革命運動をする孫文ら中国の革命家にまず理解を寄せたのは槌子だっ

た。「そのころ（1905年）私は貧乏のなかで自分の着物を質に入れ、二枚の浴衣を揃えてあげました。孫さんはその浴衣を大変喜んで着ておられました。明治42年（1909年）に來られた頃も、それを大事に持っておられたのには、私も随分驚きました。孫さんは質素な儉約な方でした」¹¹。そして龍介ら子供たちは訪れる中国留学生、革命家やその家族と親しくなり、庭で剣道をして遊び、彼らの孤独と緊張の一服の癒しとなった。

中学生に上がったばかりのころの龍介は、孫文が一体どのような人か、何をなそうとして自宅にいるのかを十分に理解できなかった。しかし、それでも父が孫文や「孫文を訪ねてくる中国人革命家や学生らと酒を飲んでは大言壮語し、時には口角泡を飛ばして、何事かを論争していた」姿を傍らで見て少年期を過ごした。ある時は「そら警官だ、と言ってあわてて孫文を押し入れに隠したこともあった」¹²。また「或る時は、留学生の某が行方不明となりその嫌疑だと言って家宅捜査をうけたことがあった。かうした事件があるごとに、僕の脳裏には父の仕事が只事ではないことが印象されて來はじめた」。

無類の筆まめであった滔天は、どこに居ても長男の龍介にはとりわけ多くの手紙や葉書を送り、自身の近況や心情を伝えた。「龍介よ、学問は智賢を拡むるを得べし」、「一同健在なれ清貧なれ」と勉学、健康を気遣い励ました。

革命に使う金はあるも家族に使う金はないと言いつち、自分ら家族の暮らしを顧みないと思えた父は昼は革命に奔走するも、夜は家族の暮らしを支える為に寄席に出て浪曲を語り、小銭を稼いで糧としていた¹³。しかし父滔天は革命の金で家族を養おうとは決してしなかった。金銭に対する父の異常な潔癖が、自分ら家族を常に赤貧に置くことになったことを龍介が理解できてきたのも、父との暮らしのなかでだった。「父は頗る酒を嗜んだ。（中略）酒とは反対に金銭はひどく卑しんだ。父は外出するにも恐らく、一円以上の金は持っていなかったであろう。父が生涯赤貧を以て終わったのも、極端に金銭を卑しんだがためである。父のこの金銭嫌いの潔癖は、やはり親譲りの性癖だった」¹⁴。父の抱負を知り、支援する中国人革命家や

その家族と知り合い、中国革命に無垢な情熱を奉げる父の姿を追ううちに、龍介の中には父滔天に対する敬意が芽生えていったのである。

「ある日父は一通の手紙を僕に持たせ、之を黄興の家（一か月余滔天宅に投宿していた黄興は1908年12月末西大久保一五八に家を借りて住んだ―筆者注）に届けろと命じた。僕はそれをもって黄興の家に行くと、そこに汪兆銘（汪精衛）が居た。（中略）手紙の内容は知らないが、しかしそれから間も無く汪兆銘は黄興の命令を受けて、北京に行ったと云う話を聞いた」。1909年龍介が中学生のころの事、辛亥革命の2年前である。

このころ革命に必要な武器の調達も滔天は仲介していた。「然し父は、そんな取り締まり厳重な××物を手に入れる方法など知ろう筈はない。父は苦心の末、軍人に相談するがよかろうと考え、千島探検で有名な郡司大尉に相談したのである。すると郡司大尉から父に紹介した人は本郷金町に住んで××商を営んでいた倉地鈴吉と云う人物。郡司大尉は「倉地は今天野屋（四十七士に武器を調達した商人）である。律儀で忠実で、秘密の守れる人だから、何事でも信用して相談しろ」と云って推薦したのだそうである。それから支那革命の成立するまで、倉地氏の取扱った品物が、どれだけ支那革命に貢献したかは、知る人ぞ知るである」¹⁵。××では何のことか分かりづらいが、文章は1938年戦争の最中の発表なので、××は筆禍を避ける工夫だ。××に武器の言葉を入れると分かりやすいだろう。

このころ龍介は、ある日思いがけなく母槌子に古着屋でマントを買っておいでと金を渡され、うち喜んだ。中学から高校まで幾度も学校で月謝未納の掲示を出されるような暮らしの中では、無いことだったからだ。得意げに黒いマントを買ってくると、「父は四角な七八寸四方位の紙包みの重い荷物を二個宛與へて、これを本郷の呉英珊の家まで運べと命じた（中略）二三回も同じ荷物を運んだのである。（中略）荷物を運び終わってから、母に荷物の何であったかをしつこく問ねると、母はそれが恐ろしい××だったと僕の耳元で囁いた」¹⁶。

龍介らが四川省出身の帝大学生呉英珊の家に運んだダイナマイトは、神戸から上海に渡り無事同

志の手に届けられた。1909年～10年初めごろの事だと考えられる。孫文らの反清革命の意義はこのころにはすでに、呉のような官費留日学生や清朝政府の官吏内にも浸透していたが、同時に革命党への監視と警戒も一層厳しくなっていた。のちに（1964年）龍介は呉英珊のその後について、「呉英珊は共産黨員となってパリに亡命、今は北京人民大学学長をしており、文字改革の主唱者であり責任者でもあります」、と記している¹⁷。

父との同居が始まって3年が経つころ、龍介の意識は父と同様に中国革命を支援する“事業”に参加する側に立とうとしていた。しかしそれは、滔天から聞く中国革命談議によるものではなかった。なぜならば警察の監視下にあった滔天は、孫文ら中国革命家の計画が漏れることや、自身の家族らに累が及ぶことを危惧して、「（革命活動に関しては）極端な秘密主義者だった」¹⁸。成長に伴い龍介は、父がなぜ中国革命に共鳴しどのような支援をしようとしているのかを日常のなかで身をもって感じていくなかで、無欲無私で孫文らに尽くす父の姿に、龍介の父への嫌悪は徐々に敬意へと変化していった。そして父への敬意は、龍介のなかでやがて、父と同じように誠実に中国と向かい合いたいと願う「目標」になっていったのである。

3. 宮崎龍介の孫文観

成長した後龍介は、孫文に関していくつかの文章を残している。1923年3月雑誌『改造』に出稿した「孫逸仙物語」は初期に書かれた文章のひとつだ。「孫氏は近頃肝臓を病んで絶対安静が必要である。まだ起き上がることは出来ないが、段々と良くなりつつある」という宋慶齡夫人の英文の手紙を受け取り¹⁹、安堵と不安の入り混じった心境で書かれたものだ。

「孫逸仙氏の革命思想は、何處から生まれたのであろうか」の問いに始まり、この事について龍介は孫から直に聞いた話として、「孫の革命家としての出発は貧困であった自身の環境の実感から来ており、自己の環境の脱却、さらに進んで多数の民衆を永生的な奴隷の境遇から脱却させようと血と涙の革命に進んで行こうとした」²⁰と、簡潔に記

している。内容は孫の学校時代から1895年の広州蜂起、その後の海外逃亡の辛酸、ロンドンで清朝官吏に拿捕され幽閉されるがカントリー牧師らの協力によって脱出する“kidnap in London”まで（1897年日本にわたる前まで）の孫文の歴史を淡々と記し、中国革命をめざす孫文という人物を紹介している。この文章を発表した1923年は、9月1日に関東大震災が発生し日本の中樞が壊滅的被害を受けていた。龍介は東京帝大を卒業して弁護士を始めていたが、一高時代に患った結核が再発して三年にわたる寝たきりの生活を余儀なくされていたときだ。

1925年『解放』²¹に書いた小文「孫文の遺稿」は、孫文の没後龍介に届いた孫文の秘書戴季陶が著した冊子『孫文主義之哲學的基礎』にふれたものである。戴季陶が分析した孫文の三民主義と共產主義の比較に興味深く紹介している。注目すべきは龍介がそのなかで、「孫文は説くべき多くの問題を残して世を去ったのである。従って今となってはこれまでの草案や未完稿や平生の言説を親しく聞き知っている人に依ってその未完成の部分の説明してもらふ外はないのである」²²と、志半ばで逝去した孫文の遺志継承事業の必要性に言及していることである。

日中戦争が終わってから20年を経ても日本がまだ、中国と国交を回復できないでいた1970年、中国革命に生涯をかけた父滔天の遺業と遺跡を継承保存し、以って日中国交回復の背中を押す事業として『宮崎滔天全集』（平凡社）企画に参加した龍介の姿が重なるからである。

1974年、務台光雄読売新聞社社長、肖向前²³駐日中国大使館参事官ら百余名が参加して『宮崎滔天全集』出版記念会（1974年1月24日）が東京・般若苑で盛大に開かれた。1971年に逝去した龍介は出席することはかなわなかったが、記念会の席上、龍介の東大「新人会」時代からの友人岡田宗司氏らが発案した、滔天らの遺志を継承する組織「滔天会」の結成が決議された。この「滔天会」は以後現在まで、同日宮崎家遺族として謝辞を述べた龍介の長女宮崎蓀女史によって、日中友好の学術文化組織として継承されている。

龍介は自宅でもとに過ごした孫文とのエピソードも新聞、雑誌で紹介している。中学二年生の時

孫文から日露戦争の日本勝利を喜んだ話を聞いたことを1966年の『朝日新聞』に書いている。1905年欧州から日本に向かう船がスエズ運河を通った時、「船が港にはいると、土着人たちが孫文の肩をたたいて、君は日本人かと聞く。僕は中国人だと答えると、土着人たちは君は日本が戦勝したことを知っているかと問う。知っているかと答えると、君は嬉しいと思わないかと問い返す。もちろんうれしい、僕は期待をもって日本に行くところだと答えると、土着人たちは孫文の両手をとって、堅い握手をする。孫文は全アジアが日本の勝利を喜んでいることを知り、彼もまた喜び張りきって日本に来たということである」。

このなかで龍介は、孫文が逝去の前年1924年11月神戸に立ち寄った際、同行の戴天仇が龍介に「先生（孫文）は上海をたつ時、アメリカの船はいやだといって日本の上海丸に乗ったんです」と言われたことを紹介し、「孫文は連ソ政策を明らかにしたのであるが、それでも彼は、日本に対する愛着は捨てていなかった」と述べている。

1966年中国はすでに毛沢東らの共産党が指導する中華人民共和国になっており、龍介は「中国共産党の努力とソ連の協力とで、孫文が理想とした三民主義の社会を越えて、社会主義の社会がつけられ、孫文説くところの民生主義はより高い次元で実現された」と中華人民共和国は孫文の思想を継承しているという認識を示している。

そのうえで、1919年の「五四運動」前からの孫文の民生主義の実現方法についての変化を高く評価している。「労働者農民の力によらねば革命は成就しないことを認め、彼（孫文）は上海に移り、雑誌『建設』を刊行して人民大衆の啓発に精力を注ぐようになった」。そして龍介は、「先覚者孫文の特徴は、彼がすなおに実践の経験を通して、彼の思索を培い、みずからの（革命）思想を発展させていった点にあるとわたしは考えている。そして私が彼にたいして感ずる魅力もまたそこにある」²⁴と述べている。

朝日に書いた文章からひと月後の11月12日、東京の朝日講堂で「孫文先生生誕百周年記念」が開かれ、龍介は講演して孫文の回想を話している。

ベトナム戦争がとりあえず終結し、中国では10年の災禍をもたらす文化大革命が始まり、細いなりにも通っていた日中交流も困難な状況になっていた。龍介はそれでも、「今の日本の大方の政治家や実業家の間には、毛沢東と手を握ると、日本が赤くなると云う考えがあります。考えているばかりではありません。さように高言して居ります。また国民の間にも、こうした考えの人が少なくないのです。つまり毛沢東は赤だ、共産党の政府と交わると日本が赤くなると、まじめにこわがっているのです。赤鬼をこわがって逃げている。だがこれはちょうど、山縣有朋が北京政府（孫文が大統領を移譲し袁世凱軍閥の北京政府ができた）ができると、日本の国体を危うくすると云って、孫文から逃げたのと同工異曲、少しもかわりがないのであります」²⁵と語り、現実の中国共産党政府を理解する努力をせず、中国を危険視するばかりの日本政治の脆弱な中国観を危惧し、かつて日本政府が孫文にしたように、利が見えると近づきソ連と関係すると危険だとして一転取り締まる。遠視大局観を持たない日本の中国政策と同じ過ちを、いまもわれわれは犯しているのではないかという疑問をていしている。

少年のころ頻繁に自宅に逗留していた孫文の印象については次のように書いている。「しんの強い非常に頑固な人でした。読書がすきで、（中略）来客があっても要談がすむとすぐ書物に目を移す。むだ口をきかない。それで初対面の人など、孫文は不愛想だとよく評したものです。従ってあまり世間的でなく、政治資金など作るのも極めて下手、また戦も上手でない。一揆を企てても北伐をやっても成功しなかった」。しかし、「理想に向かって進む執着と、革命に対する熱意とに於いては、彼の右に出る者は一人も居なかったと言ってよいでしょう。これが孫文が先覚者として、また革命の父として、今も尊敬されているゆえん」²⁶だと。龍介は革命に対する孫文の「執着」こそが、比類なき彼の特質だと評価している。

「理想を追う者、新しきを創造する者は、一見非常識にみられる。世間から奇人だとか気ちがいだと言われるものです。孫文もその点では（中略）変わり者の扱いをうけ、その片棒をかついだ滔天

が気ちがいの扱いをうけ「ボロ滔天」の通称をもらったのも無理ないことだったわけです」²⁷。火のような情熱から発した革命に対する執着心が革命家には無くてはならない資質だと龍介はみている。

さらに、ほかの指導者と比べて孫文が特に光っていると評価している点は、孫文が時代とともに革命思想を深化させ続けた柔軟性、現実的な点だ。「革命後幾多の困難な経験に突き当たった結果、彼は、大正七年（1918年、「五四運動」の前）頃から、労働者農民の力によらなければ、革命の完成はできないことを認めて、その翌年から、真剣に大衆運動に取り組み始めました」²⁸。龍介は孫文の思想変化を社会民主主義から社会主義への「発展」とみている。この評価は、当時の龍介自身の思想傾向が投影されている。

しかし龍介は父滔天のように、孫文という人物に心酔したわけではない。1966年、雑誌の対談で「中国革命家のうちで誰が一番好きでした？」と聞かれた龍介は、「やっぱり黄興なんかも人間的にはいい人でしたね。孫文さんというのは、人づきあいの悪いひとでしたね。ということはね、おせじもぜんぜんいわない。こっちから話しかけるまでむこうもしゃべらない、という人なんです。しょっちゅう本ばかり読んでる人でしたよね。みな横文字—英語—の本ですけどね。（中略）あの人は、どんな若い者でもね、一人前に扱う人でしたよね。むずかしい議論をふっかけてくるんですよ。こっちが答えられないようなことをね」²⁹と率直に語っている。

龍介は孫文よりも革命の右腕の黄興に、人間的な親しみを感じていたようである。黄興の長男黄一欧は一時期（1907年～1910年）滔天宅に預けられ、龍介とは兄弟のように生活し、黄興のほかの子供たちも次々と滔天宅に寄宿したこともあり、黄興一家との家族ぐるみの交流は龍介の心象に大きな影響を与えているだろうことを差し引いても、黄興はその風貌と包容力から、日本の多くの友人たちに“中国の西郷隆盛”と称されて好かれた。

（誌面の都合で続きは専稿「宮崎龍介の日中平和行動」で論述する）

- ¹ 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，559頁
- ² 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，480頁
- ³ 地主としての宮崎家は、玉名で二番目の土地持ち（一説に三百俵位の得米をとるといふ）といわれる富農で郷士（武士）の家柄であった。『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，589頁
- ⁴ 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，504頁
- ⁵ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，282頁
- ⁶ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，282頁
- ⁷ 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，480頁
- ⁸ 築地宜雄「宮崎滔天」，『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，485頁
- ⁹ 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，382頁
- ¹⁰ 宮崎槌子「亡夫滔天回顧録」，『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，511頁
- ¹¹ 『宮崎滔天全集』第五卷，平凡社，1976年，511頁
- ¹² 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，283頁
- ¹³ 滔天は1907年8月9日，東京府より「浪花節営業鑑札」を交付され，白浪庵滔天として全国の寄席に巡業した。
- ¹⁴ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，284頁
- ¹⁵ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，286頁
- ¹⁶ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，287頁
- ¹⁷ 宮崎龍介「中国革命同盟と宮崎兄弟」『社会文庫叢書』第七卷，柏書房，1964年，109頁
- ¹⁸ 宮崎龍介「宮崎滔天」，『文芸春秋』時局増刊号9，文芸春秋社，1938年，284頁
- ¹⁹ 宮崎龍介「孫逸仙物語」，『改造』第7巻3号，改造社，1923年，183頁
- ²⁰ 宮崎龍介「孫逸仙物語」，『改造』第7巻3号，改造社，1923年，185頁大1919年
- ²¹ 1919年に吉野作造，福田徳三，大山郁夫らが設立した「黎明会」の機関誌的役割を担った雑誌。軍国主義，専制主義等の圧迫から諸階層の全人類を開放することを目的として刊行した。
- ²² 宮崎龍介「孫文の遺稿」『解放』第四巻第2号，解放社，1925年，123頁
- ²³ 1956年宮崎龍介が毛沢東，周恩来と天安門に立った時，日本語の通訳を務めた廖承志の部下だった人。
- ²⁴ 宮崎龍介「孫文のある思い出」『朝日新聞』夕刊，1966年10月19日
- ²⁵ 1966年11月12日「孫文先生生誕百周年記念」の宮崎龍介講演「孫文回想」原稿に自身が加筆したもの。
- ²⁶ 同上
- ²⁷ 同上
- ²⁸ 同上
- ²⁹ 宮崎龍介，野沢豊対談「孫文の思い出」，『歴史評論』12，

春秋社，1966年，30頁